

I 研究主題

児童生徒が「できた」「わかった」と感じられる授業づくり

～学習の振り返りの充実～

II 主題設定の理由

本校では、令和3・4年度の校内研究において、各教科等を合わせた指導の充実を目指して研究に取り組んだ。各教科等を合わせた指導において、各教科等の視点を踏まえた目標を設定して指導、支援に取り組むことをとおして、児童生徒一人一人の主体的な姿につなげることができた。また、様々な視点から授業づくりをすることの重要性を再確認することができた。

今年度、新たな研究を進めるにあたり、次年度に取り組みたい内容について職員アンケートを実施した。様々な意見が挙げられたが、その中でも、「ICTを活用した授業づくり」「実態の異なる集団での授業づくり」など、授業づくりに関わる意見が多く挙げられた。そこで、今年度の研究は、昨年度までとは異なる視点から授業づくりに取り組むこととした。授業づくりの研究を進めるにあたり、新しいものを取り入れるのではなく、普段取り組んでいる授業の進め方や活用しているプリントの様式を再度見直すことができるような研究にしたいという意見が挙げられた。そこで、岩手県で令和2年度より取り組んでいる「確かな学力育成プロジェクト」の中で、主体的・対話的で深い学びの実現として提示されている「いわての授業づくり3つの視点」を参考にしながら研究を進めることとした。

【いわての授業づくり3つの視点】

視点1：学習の見通し

視点2：学習課題を解決するための学習活動

視点3：学習の振り返り

この3つの視点は相互に作用するものであるが、3つの視点の中からさらに1つの視点に焦点を当てることにより、より分かりやすく授業を組み立てることができるのではないかと考えた。そこで、本校では3つの視点の中から、日々の授業づくりをする上で簡略的になりがちな「学習の振り返り」に焦点を当てて研究を進めることとした。

「学習の振り返り」を充実させていく上で欠かせないものが目標設定である。教師の一方的な目標ではなく、児童生徒自身が分かって活動できる目標を設定し、その上で充実した振り返りを行う。そうすることで、児童生徒は「できた」「わかった」という達成感を感じられ、次の学習への意欲につながるのではないかと考え、本主題を設定することとした。

III 研究の目的

児童生徒自身が分かって活動できる目標設定と、それに基づく「学習の振り返り」を検討、実践することにより、児童生徒が「できた」「わかった」と感じ、次への目標につながる授業づくりをする。

IV 研究の内容

1 研究期間

2年間（令和5年度～令和6年度）

2 研究内容

- (1) 授業における児童生徒自身の目標と教師の目標の共有を図る。
- (2) 授業の目標の設定・提示の仕方とそれに基づく学習の振り返り方法の検討をする。
- (3) 実践をとおして、PDCAサイクルによる授業改善・支援方法の充実を図る

3 推進計画

	1年次	2年次	
4月	第1回全校研究会	第1回全校研究会	
5月	全体の研究計画提案	2年次の推進計画の提案及び学部研究について	
6月	学部ごとに推進、実践	学部ごとに推進、実践	
7月	↓	↓	
8月			(高教研講演会)
9月			
10月			開かれた授業研究会
11月			研究のまとめ(2年次)
12月	開かれた授業研究会 (9~11月)	研究のまとめ(2年間)	
1月	1年次のまとめと次年度の方向性	第2回全校研究会(研究のまとめ)	
2月	第2回全校研究会(1年次のまとめ)	次年度の研究について、アンケートを実施	
3月	2年次計画の検討	次年度の研究テーマについての検討	

V 各学部・寄宿舎の実践

1 小学部

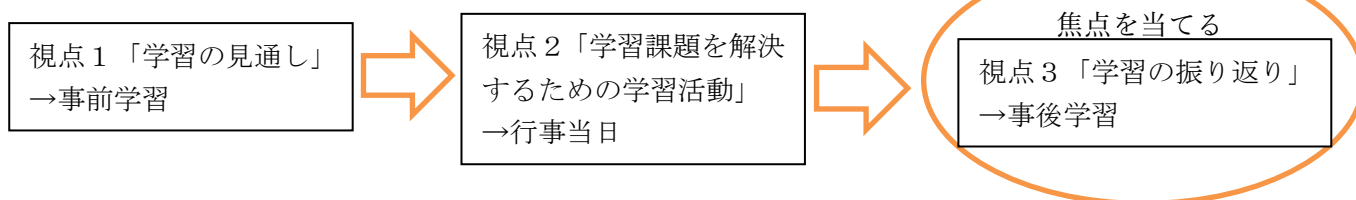
〈小学部研究テーマ〉

生活単元学習における学習の振り返りの充実～事後学習内容の検討を通して～

(1) テーマ設定の理由

全校研究の内容でも取り上げられていた「いわての授業づくり3つの視点」を、小学部では生活単元学習の行事単元に当てはめて、以下の通りに捉えることとした。

〈小学部としての捉え〉



事後学習の内容を充実していくことによって、単元全体の学習内容のより一層の定着を図り、児童の「できた」、「わかった」につなげることをねらいとした。

(2) 研究計画

	内容
5月	第1回全校研究会、方針確認
6月	内容検討
7月	授業実践
8月	
9月	研究授業・授業研究会
10月	
11月	↓
12月	研究のまとめ、次年度の方向性
1月	↓
2月	第2回全校研究会
3月	次年度の研究の検討

(3) 実践の方法・内容

- ・低学団・高学団2つの研究グループに分かれる。
- ・取り上げる行事単元と対象児童を決める。
- ・事後学習の内容（個人の目標、支援の手立てなど）についてグループごとに検討し、児童の様子を記録する。
- ・目標設定や支援の有効性をみる。

【低学団】

対象児童：3年生1名（児童A）、2年生1名（児童B）

対象単元	事後学習内容
3年生宿泊学習（大船渡） ・福祉の里に宿泊 ・YS プール利用 等	・写真や動画での振り返り ・壁新聞作成 ・思い出発表
低学団校外学習（陸前高田方面） ・BRT 乗車 ・まちなか広場で遊ぶ	・写真や動画での振り返り ・しおり作成（当日の写真、特に楽しかったことに花丸シール） ・楽しかったこと、がんばったこと発表
焼き芋会 ・焼き芋実食 ・スイートポテト作り	・写真や動画での振り返り ・壁面制作（手作りさつまいもと写真） ・調理（スイートポテト作り） ・サツマイモ掘りゲーム作成

研究対象とした単元と児童について、「事後学習構想シート」というものを作成し、低学団の中で共有しながら研究を進めた。手順としては、最初に事後学習構想シートの、「学習内容」、「目標の設定・提示の仕方」、「学習の振り返りの方法」、「支援の手立て」、「できた、わかったの姿」の項目について作成した。事後学習を実施後に、「振り返り」の部分に対象児童の学習の様子を記入したものを再度、低学団で共有し、事後学習の有効性について検討した。

单元名 宿泊学習に行こう
 対象児童 児童 A

	事後学習①	事後学習②	事後学習③
学習内容	写真や動画を見て当日の様子を思い出す。	壁新聞を作る。 活動ごとの写真と思い出に残ったことの写真を貼る。	思い出を発表する。
目標の設定・提示の仕方	宿泊学習を思い出そう ・カレンダーを提示する	写真を選んで壁新聞を作ろう ・カレンダーを提示する ・見本を提示する。 ・学部集会で発表することを伝える。	思い出を発表しよう ・壁新聞を提示し、学部集会で発表することを伝える。
学習の振り返りの方法	・簡単な質問に答える。 (誰と何をした、楽しかったことなど)	・場所や活動ごとに写真を貼る。 ・完成したのを見る。 ・自分が貼った写真を紹介する。	・思い出に残ったことについて、写真を見ながら発表する。(できれば少し具体的に発表する。) ・友達を発表を聞く。
支援の手立て	・指さし、声掛けで動画に注目を促す。 ・質問に対し悩んでいる場合は2択で問い掛けたり、写真やしおりを一緒に見返したりする。	・どの写真を貼るか、どこに貼るか問い掛ける。	・誰と何をしたか質問する。 ・発表の手本(言葉、身振り)を示したり、一緒にやったりする。
できた・わかったの姿	・質問に答えることができる(選ぶことができる)	・自分で写真を選び、貼ることができる。 ・完成したのを見て、達成感を感じる。(「やったー」、笑顔など)	・教師と一緒に身振りを交えて発表することができる。 ・友達発表に注目することができる。
振り返り	・楽しかったことを聞く (、(動画には無いが)「お風呂」と言う。「誰と入った?」)と聞くと「夏希先生」と言っていた。	・思い出コーナーにはプールの写真を選び貼ることができた。 ・完成したのを見て、笑顔でトントントンと写真を指差していた。	・「大きいプールはどうだった?」と聞くと、「やだ」「こわい」と自分で言えた。小さいプールは「できた」と言う。「楽しかった」という言葉が出なかったが、Tがジェスチャーをすると言えた。発表も大きい声で促すと大きくできた。

先生のジェスチャーや声掛けなどの支援によって思い出を発表できた。

図1 低学団事後学習構想シート

○成果

- ・掲示物の作成において児童の意欲的な様子(写真を見る・貼る・切る等)が見られた。作成した模造紙を掲示しておくことによって、児童が指差しなどで周囲の先生に思いを伝えることができた。
- ・児童が読む、書く、貼る活動などを実践し、しおりを活用することの有効性が見られた。
→児童の実態によってしおりの中身や、みんなで一つのしおりを作る活動なども検討する必要がある。
- ・低学団で事後学習の定番の流れを作成することが児童が見通しをもつことにつながった。
(例)最初に動画や写真での振り返り、最後に楽しかったこと発表

○課題

- ・学部で共通して、事後学習(最初と最後の形)を定型化した方が見通しをもちやすいと考えられる。

【小学団】

対象児童：4年生2名（児童C、児童D）

対象単元	事後学習内容
校外学習②（釜石方面） ・三陸鉄道乗車 ・震災学習 等	・写真や動画での振り返り ・C：日程表に写真貼り D：スタンプラリー振り返り ・三陸鉄道乗車、大船渡の津波被害について ・C：オブジェ作り D：津波、避難体験、ワークシート ・発表練習、発表
4年生宿泊学習（花巻方面） ・災害体験 ・ジャンパランド、おもちゃ美術館訪問 等	・写真や動画での振り返り ・日程表整理 ・制作（トランポリン装飾、おもちゃ） ・発表

対象児童2名が取り組む「校外学習②」「4年生宿泊学習」を対象単元として選択した。行事単元事後学習の各回においての個人の「目標」「できた、わかったの姿（具体的な言動）」「手立て」を授業内容に合わせて検討し、事後学習計画を立てた。授業終了後「振り返り」を記入し、有効な活動や支援について振り返った。

事後学習計画□□□単元名□「校外学習②」□□□□ 児童C

回	授業内容	目標	できた、わかったの姿	手立て	振り返り
1	・動画や写真を見て、校外学習に行ったことを振り返る。 [7月10日(月)3・4校時]	・映像や写真を注視することができる。	・指をさす、画面に近づくなど。	・映像や写真を見るよう声がけをする。	・恋し浜駅の鐘やラグビーボールオブジェの写真が出ると、自分であることが分かり笑いながら注視していた。
2	・校外学習で行ったところを思い出して、写真を選んで行程表に貼る。 [7月10日(月)5校時]	・鞆住居でボールのオブジェを見たり触ったりしたことを思い出し、行程表に写真を貼ることができる。	・ボールのオブジェの写真を、うのすまい・トモスの場所に貼ることができる。	・児童が思い出しやすいような写真を選んで使う。	・6枚の写真の中からラグビーボールオブジェの写真を自分で選び、行程表のボールの写真の隣に貼ることができた。
3	・切符の買い方を思い出して券売機で切符を買い、三陸鉄道に乗る。 [7月11日(火)2・3校時]	・券売機に自分でお金を入れ、教師と一緒に切符を買うことができる。	・自分でお金を入れる。 ・子ども・行き先ボタンを押す。 ・取り出し口から切符を取る。	・教師のメモを確認しながら券売機を操作できるようにする。	・自分でお金を入れ、行き先を押すときに少し迷ったが、教師の支援でボタンを押すことができ、切符を取ることもできた。
4	・三陸鉄道に乗って鞆住居に行ったことを思い出して、三陸鉄道の線路や恋し浜駅の鐘、釜石のラグビーボールオブジェを作る。	・恋し浜駅のホームで鐘を鳴らしたことを思い出して鐘を作る。	・作った鐘を鳴らすことができる。	・鐘を鳴らしている写真を提示する。	・作業前に鐘を鳴らす写真を見せたときは笑顔が見られた。 ・恋し浜の鐘の写真の裏にポントを塗り、段ボールに張り付けることができた。 ・鐘を荷ひもでスタンドにつける時、両手でひ

何を作っているのか理解しながら制作に取り組めた

図2 小学団事後学習計画

○成果

- ・写真を見て貼る活動で当日の活動を思い出すことができた。
- ・制作の活動は実態的に有効だった。
- ・事前学習～当日～事後学習を通して、券売機の使い方に慣れてきた様子が見られた。

○課題

- ・学習したことの発表が難しかった。
言葉の不明瞭さがあり、「話す」ことの練習になってしまった。
伝えられたことを理解することができる児童が少ない。
- ・BRT や三陸鉄道を利用する目的の設定が難しかった。

【開かれた授業研究会】

小学部4年の生活単元学習（小単元名「ぼくたちの美術館をつくろう」）の研究授業及び授業研究会を行った。研究に関わって、生活単元学習の行事単元の事後学習に焦点を当てた実践に取り組んだ。授業研究会では、「見たこと・体験したことを想起できる事後学習であったか？」「事後学習において、大切にすべきこととは？」の2つの協議の柱について、グループ協議を行った。「児童に何ができてほしいのか「できた」、「わかった」の姿を明確にした方が良い」ということや、「児童が自分の思いを確かめたり、考えたりする余白の時間をもっと確保した方が良いのでないか」などの助言をいただいた。

(4) 成果と課題

【全体を通しての成果】

- ・対象児童を抽出することで視点を絞って研究を進めることができた。
- ・写真・動画での振り返り活動やしおりを制作する活動は有効だった。

【全体を通しての課題】

- ・行事に応じて、発表対象を学団内や学部全体にするかなどの検討が必要になる。
- ・児童の実態に応じた発表の仕方の工夫が必要である。
→感想のみならず、事実の確認でも良さそうである。
(例) 乗ったのは電車？飛行機？などの問い掛けの仕方を工夫する。

(5) 次年度に向けて

- ・対象単元や対象児童を変えても事後学習での活動や支援が有効か、他に有効な方法があるか、検討する。
- ・低学団と高学団の事後学習計画の様式をそろえる。
- ・有効な活動を分類し、事後学習の大まかな流れを確立する。

(事後学習における活動の例)

当日の活動を思い出す	活動を再現する	発表する
・写真や動画を見る ・日程表やしおりに写真を貼る	・見てきたものや体験してきたものを制作する ・公共交通機関の使い方を確認する	・学部、学団で発表する ・体験したことの事実を確認する ・掲示する

2 中学部

(1) 研究のねらい

全体研究主題「児童生徒ができた、わかったと感じられる授業づくり～学習の振り返りの充実～」を受けて、中学部では、作業学習を対象として研究を進めてきた。生徒がその日の目標を理解して作業に臨み、目標を達成できたと感じられるような授業づくりを目指すことをねらいとした。

(2) 研究計画

	内 容
5月	第1回全校研究会 中学部研究の方法、内容の確認
6月	作業班ごとに、授業内容の課題点、改善案検討
7月	授業実践、生徒の様子記録①
8月	↓
9月	改善内容、改善後の生徒の様子を学部で共有
10月	授業実践、生徒の様子記録② それぞれの作業班の授業を見合う
11月	開かれた授業研究会
12月	1年次のまとめ
1月	次年度の研究方法・内容の検討
2月	第2回全校研究会

(3) 実践の方法・内容

【作業班ごとの取り組み】

初めに、作業班ごとに現状の授業の課題点、問題点を話し合った。特に授業の中の目標の確認や振り返りの部分に重点を置き、「日誌について」「始めの会・目標の提示について」「反省会・振り返りについて」「授業の流れ・活動について」の項目で話し合いを行った。次に、改善案を検討し、改善した内容での授業実践を行った。授業実践後は生徒の変容を記録し、学部内で共有した。

〈木工班〉

授業改善点

- ・始めの会と反省会の進め方を検討し、項目を変更した。ノルマの数の提示、目標や反省を個々に発表するなどの変更を行った。
- ・日誌の様式を変更した。反省を書く欄を「できたこと」、「難しかったこと」に分けた。また、自分で評価して○や△を付けていた部分を教師と一緒に振り返り、記入するようにした（資料1）。
- ・日誌の内容を黒板に記入することで、日誌の内容を全員で共有し、自分自身も意識しながら作業に取り組めるようにした。（資料2）
- ・作業内容を可能な限り固定し、一つの作業工程の深まりを図った。
- ・作業がスムーズに進むための動線の工夫や、安全に集中して作業できる場の設定、教師の入り方などを検討し、改善をした。
- ・作業の中で、目標を意識できるような声掛けを行った。

生徒について (E)

改善前の様子	改善後の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・反省で「難しかったこと」について自分から挙げるができなかった。 ・目標を考える際、「丁寧に塗る」や「安全に作業する」などの大まかな目標が多かった。 ・作業スピードを意識せず、自分のペースで作業を進めていた。 ・次の作業に移る際に、分かっているも教師に「次は〇〇でいいですか」と確認をしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師に指摘されたことや達成できなかったことを振り返り「難しかったこと」を考えることができるようになった。 ・これまでの反省での難しかったことを振り返りながら「ニスをムラなく塗る」「自分で確認しながら早く作業する」など、より具体的な目標設定ができるようになった。 ・ノルマの数を意識し、スピードも意識しながら作業を進められるようになった。 ・自分で黒板を確認して次の作業にスムーズに移ることができるようになった。

〈工芸班〉

授業改善点

○日誌 (資料3)

- ・日誌の様式を個人に合わせて変更し、シール表を新たに作成した。
- ・日誌を書く際に、目標数を担当教師と確認し、シール表に印を付けるようにした。
- ・作業が終わったら教師に報告をして、シール表にシールを貼ることとした。
- ・目標数を達成できたかどうか、○△×で自己評価することにした。

○反省会

- ・振り返りの際にシール表をみんなに見せ、目標を達成できたのか、どのくらい作業したのかが、一目で分かるようにした。

○その他

- ・作業内容に合わせて、効率よく集中して作業できるように、作業場所や道具の配置を変える等、場の設定を改善した。
- ・あらかじめ用意している選択肢から目標の言葉を選択できるようにした。(資料4)

生徒について (F)

改善前の様子	改善後の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・一人で目標を考えることは難しかった。 ・作業をすればいいという考えで、目標数の達成や質の向上までは意識できていなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・選択肢からその日にふさわしい目標を自分で選ぶことができるようになった。 ・目標数の達成を意識するようになった。 ・出来栄が良くないときはシールを貼らないという判断ができるようになった。 ・作業の量と質、どちらも意識できるようになった。

【開かれた授業研究会】

木工班の作業学習(単元名「販売会に向けて製品を作ろう」)の研究授業及び授業研究会を行った。研究に関わって改善した内容を授業に盛り込んだ。授業研究会では、「生徒ができた、わかったと思える振り返りになっていたか」「自分の役割の中で、生徒が主体的に行動するための手立て、支援」の2つの協議の柱について、グループ協議を行った。作業途中での評価も大切であり、作業途中での評価が、最後に生徒が振り返る際の手本にもなる、という助言をいただいた。

(4) 成果と課題

【生徒にとっての成果と課題】

- ・授業改善後の生徒の様子から、自分の作業内容や目標を理解して取り組むことができてきたように見えた。

【職員にとっての成果と課題】

- ・生徒の様子から、「生徒ができた、わかったと感ぜられる授業」に近付けることができたと考えられる。
- ・各作業班で話し合いの時間を設定したことによって、授業の進め方や生徒の様子について共通理解を図り、指導の統一性をとることができた。
- ・研究を通して、目標を的確に設定することや、しっかり振り返りをするに目を向けて授業づくりをすることができた。
- ・生徒の達成具合や取り組み状況を見取り、一人一人に向き合いながら授業づくりをすることができた。
- ・目標を、数から製品の質の向上に変えていく必要がある。
- ・生徒の姿から成長を読み取れるように、評価の規準を明確にしていく必要がある。
- ・タブレットを使用する等、生徒にとって有効な振り返りの方法についてさらに検討していく必要がある。

(5) 次年度に向けて

- ・今年度、成果が得られた取り組みを継続しながら、来年度も作業学習を対象に研究を進めていく。
- ・今年度よりさらに「生徒ができた、わかったと感ぜられる授業づくり」ができるよう、研究方法、内容を考え、実践していきたい。
- ・作業学習での授業づくりを深めた後、他教科への生かし方を考えていきたい。

資料1

11 月 28 日 火 曜日				
作業内容	はりつけ サイダー			
目標	ていねいに はかす ぎょうず			
反省	○できた ていねいに はかす。			
	△むずかしかった 木をまっすぐにはる。			
先生から	いタガネをつけるときに ずれないように気を付けましょう			
今日の評価 (先生が書きます) △がんばろう ○できた ◎とてもよくできた				
あいさつ 返事	安全	ていねい	集中	言葉づかい
○	○	○	○	○

資料2

担当	今日の仕事	今日の目標	できたこと	むずかしかったこと
担当生徒の顔写真	松① ニス1×4②	ていねいにニスをぬる	ていねいにニスをぬる	木をせりぬる。
	カニ	ていねいにさぎょうする	きつとわたす	よし
	水と松② ニス1×4②	近くで郵送	目標たせいでました	木の2本水とぎの中の本や柄がぬる
	カニ	まっすぐ	○まっすぐ	△ 7とリテ
	のこぎり松② 1×4②	まっすぐ	まっすぐ まっすぐ②③ 1×4④	よし

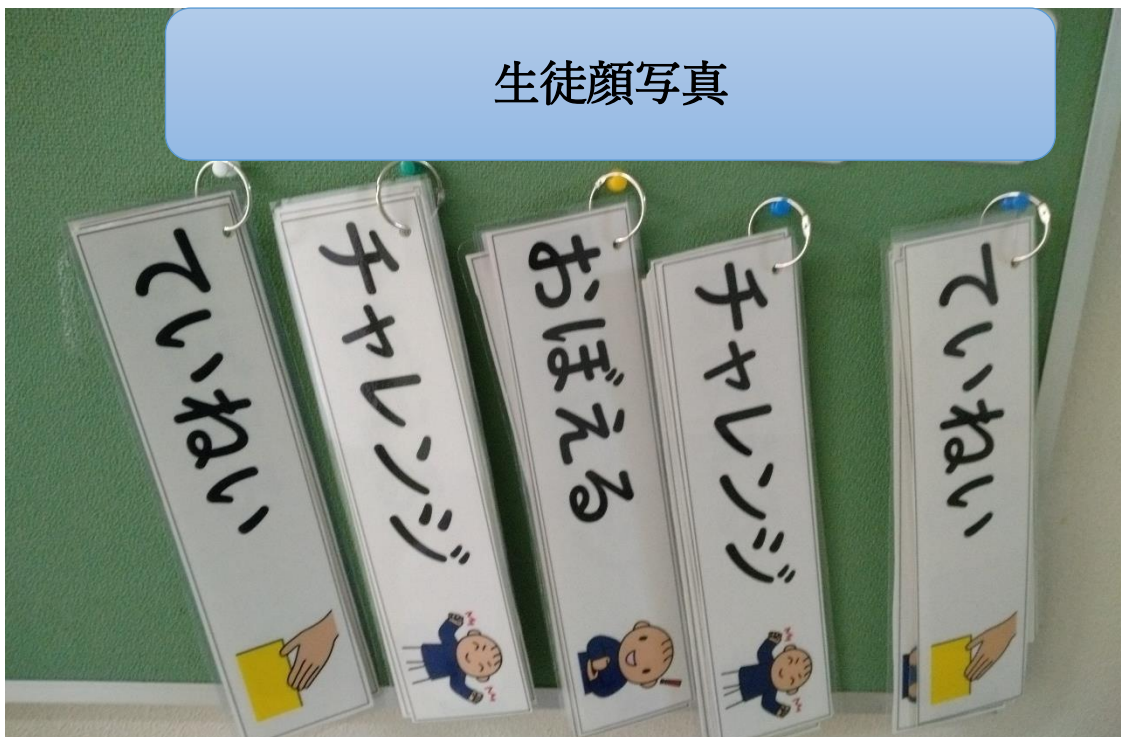
資料3

シール表

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10/30	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10/31	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 11/7	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 11/8
--	--	---	---

	11	月	7	日	火	曜日
目標	集中					O・△・X 0
作業	ミキサーかけ					
目標数	10個					
来た数	12個					
O△X	0					
振り 返り	時間 	服装 	持ち物 	あいさつ・へんじ おはよう ございます。 はい！ 	報告 できました 	準備・後片付け
O△X	0	0	0	0	0	0
先生から	ミキサーがけありがとうございます。つぎから、かみあしがとまます。					確認印
次の目標	あちかいて、つぎあちかいます。					

資料4



3 高等部

(1) 研究のねらい

全体研究会の主題を受け、高等部では各学年から1例ずつ実践例をあげ学部全体で事例検討会を行うことで、学習の振り返りのあり方、生徒が「できた」「わかった」という達成感が感じられる指導支援について探ることをねらいとし、研究を進めた。

(2) 研究計画

	内容
5月	第1回全校研究会
6月	学部研の進め方について
7月	授業実践
8月	
9月	事例検討会
10月	開かれた授業研究会 事例検討会
11月	
12月	事例検討会
1月	今年度のまとめ
2月	第2回全校研究会

(3) 実践の方法・内容

ア 事例研検討会

〈高等部1学年〉

言葉だけによる指示理解、自分が経験したことをイメージし言葉で表現することが難しい高等部1学年男子生徒Gについて、校内実習の実習日誌の様式や本校高等部の学校特設教科「産業社会と人間」の授業の様子を中心に支援のあり方について検討会を行った。

普段の学校生活、作業学習などの場面で、指示されたこと、注意されたことを理解することが難しく動きが止まり戸惑う表情を見せることがある。前期の日誌の様式(資料1)は、本生徒の実習の目標に沿って反省の項目を設け「身だしなみ」、「終わりましたの報告」、「確認のお願い」、「分からないことを聞く」、「困ったこと手伝ってほしいことを伝える」の5項目は「○・△」で振り返り、「うまくできたこと」、「むずかしかったこと」、「次にがんばること」の3項目については記述式で振り返りをする様式であった。前期の記入の様子をみると、作業中に分からないことや困ったことがあっても振り返りでは「分からないことや困ったことはありませんでした」と答えたり、注意されたことやうまくできなかつたことを思い出せず日誌記入に戸惑ったりすることもあった。また、教師と話し合った反省の内容を記述式の欄に記入する際、小さな字で記入するため、読み返すとき文字を読み取れないこともあった。そこで、後期は目標を見直し「分からないことを聞く」「困っていることを伝える」の項目は削除し、「時間を守る」、「身だしなみ」、「返事や礼をする」、「終わりましたの報告」、「お願いしますと伝える」、「先生の指示を聞く」の6項目を「○・△」で振り返り、「うまくできたこと」、「むずかしかったこと」の2項目を記述式で記入し、記述欄の縦の幅を広げにする様式に変更した(資料2)。また、その日の作業を振り返る手掛かりになるように作業のイラスト表(資料3)を作成し提示するようにした。日誌の様式を変更したことによって、自分で考えながら振り返りができ、イラスト表を見て、作業内容や注意されたこと、失敗したことを思い出し記入することもできた。また、自分のやることが分かり見通しをもって活動できる内容であれば、「物が足りない」「片付ける場所が分からない」など困っていることを伝えてくる場面も見られた。

伝えられた場面ですぐに褒め、日誌記入の反省の場面でも褒めて振り返りをした。

自分のやる事が分かり、見通しをもって活動できる内容であれば、指示や注意されたことを理解して行動したり、分からないことを伝えたりすることができた。見通しをもって活動できる作業内容にすること（環境をつくること）、思い出せるような手立てを講じることによって、その日の作業を振り返ることができ、学習を積み重ねることができるのではないかと。

高等部学校特設教科「産業社会と人間」の時間に実施した前期の校内実習の振り返りでは、写真を提示し、写真を一枚ずつ見ながら作業内容や感想などを学級全員で話し合いをし、振り返る学習を行った。写真を見て確認すること、学級の生徒達が「大根の葉、どれを切ってよいのか難しかった」、「草取りはしゃがむのが大変だった」など話しているのを聞くことによって、どんなことを話せばよいのかを理解し「大根の葉を切るとき、はさみの使い方が難しかった」など、自分で考え振り返ることができた。実習の写真一枚（一場面）毎に何をしたら学級で話し合い確認したことから実習中のことを思い出し、振り返りができたと思われる。

「産業社会と人間」の「いろいろな仕事」の単元では、学校生活の中で関わりがある学校技術員や栄養教諭の仕事について答えることができた。しかし、「スーパーの仕事」については、動画等を活用しながら説明したがイメージをもつことが難しかった。目標に対し視覚的な手立てを工夫し授業に臨むが生徒が理解できていないこともあり、日々の授業の中で、実態把握、目標の設定、指導支援、教材教具を見直すようにしている。その中で、学習プリントを作成する際は、できるだけ写真やイラストなど手掛りになるものを挿入すること、選択肢の中から答えを選べるようにすることが本生徒にとって「できた」「わかった」につながる有効な手立ての一つであることが分かった。

〈高等部2学年〉

ICT 機器を使用した修学旅行事前学習について、高等部2年生Hの指導事例を中心とした事例検討会を行った。

Hは、対人関係や活動の見通しがもてないことに不安があり、学習活動に抵抗感を示す。修学旅行の事前学習中も様々な要因が重なり、登校しぶりが見られた。本生徒はタブレットの操作することには好意的であるが、「ローマ字入力」ができないことに強い抵抗感を示し授業の参加を拒んだことが以前にあった。また、対面での発表に強い抵抗感があり、活動に参加できなかったり、気分の落ち込みから遅刻や欠課も多かったりした。そこで、本生徒の苦手なことに対する手立てを講じ「自分なりの目的をもち毎時参加する」ことを目標に、本生徒が活動を楽しみにしながら授業に参加できるような活動内容を考えた。主体的に調べることができる学習内容の設定、ICT 機器への抵抗感の軽減、対面式ではない発表会の工夫を主軸に「行き先を調べよう。オンライン発表会をしよう」の小単元を計画した。本生徒が苦手なことに対しては、教師とペアワークにすることによってタブレット操作や分からないこと迷ったことがあったときに不安感を軽減すること、オンラインでの発表会を行うことで対面での発表を回避するなどの手立てを考えた。本生徒が見通しをもてるような活動内容にしたこと、「インプット」「アウトプット」ができるような単元計画にしたこと、不安があった発表会をオンライン形式に設定し聞き手から隔離された環境を保証したことにより、単元を通して不安を訴える頻度も減り安心して活動に参加する様子が見られた。

本実践の主軸と「できた」「わかった」の捉え方

本実践において「できた=ひとつの活動が完成したことの実感」「わかった=インプットとアウトプットを行うことでの深い理解」と定義し、活動の軸を「調べ学習（情報のインプット、インプットをとおした行き先の見通し、ICT 活用の基本操作）」、「資料のまとめ（情報の精査、資料作成を通じてのアウトプット）」、「発表原稿の作成（文字情報の精査、音読を通じてのアウトプット）」、「発表会（発表活動を通じたアウトプット、ICT 機器の応用操作、発表を通じての自己肯定感の育成）」とし、小単元を計画した。

〈高等部3学年〉

後期の現場実習の事前・事後指導において、自己分析シートを活用した授業の実践例について事例検討会を行った。

自己分析シートを活用した実習の目標設定や振り返りを通して、自分自身の適性を理解し、卒業後の進路を自身で選択決定できることをねらいに取り組んだ。

自己分析シートは、「基本的な日常生活」、「対人関係」、「作業力」、「作業態度」に関するチェック項目について自己評価し、同じ項目について他者（担任）から評価を受け違いを確認し自己分析を行うためのものである。生徒の実態に応じ「一般就労版（資料4）」、「福祉的就労（資料5）」、「イラスト版（資料6）」の3種類のシートを作成した。

産業現場実習の事前学習で自己分析シートを活用し自己評価と他者（担任）評価を行う→自己評価と他者評価を確認する→他者評価で「できていない」と評価された項目について担任と話し合う→他者から「できていない」とされた項目を自分の課題と捉え実習に臨む→実習後に再度シートを活用して評価をする→「できた」項目と「できていない」項目を確認する→「できていない」項目を卒業までの学校生活における課題設定をするという計画を立て実施してみることにした。自己分析シートを活用し評価した項目を課題とし、実習時の目標設定、進路決定、学校生活における課題設定など、卒業までの学校生活に生かせるのではないかと考え取り組んだ。

事前学習の自己分析シートの自己評価と他者評価の違いがあり、担任と話し合いを通して確認すると自分の課題を見つめ直し、実習の目標に反映して実習に臨んだ生徒が多かった。事前学習の自己分析シートでは、他者が「できる」とチェックした項目を自己評価では「できない」とするチェックする生徒もいた。自己評価で「できない」の項目が多かった生徒は、自己肯定感が低いのではないかと、チェック項目の言葉の意味を理解できず「難しい、できない」と評価したのではないかと思われたことから、事後学習では、チェック項目の意味を教師と確認するようにした。チェック項目でどんなことを評価すればよいのかを教師と話し合い確認したことによって、振り返りでは「できたこと」「できなかったこと」の自己評価と他者評価が一致し、実習で経験したことを踏まえた振り返りがしっかりとできるようになり、自己肯定感も高まり学校生活にも良い影響を与えている。

事前学習で自己分析を行い自分の課題が分かったことから、明確な実習の目標を打ち出すことができ、進路決定のための実習を有意義に行うことができた。また、振り返りの際に、実習で経験したことをしっかりと振り返ることができ、自己理解を深めることができた。

自己評価、他者（担任）からの評価と実習先からの評価を通して自分の課題を理解し、課題解決する方法を模索しながら、社会生活に必要なスキルを身に付けていくうえでも、自己分析シートを使った事前・事後学習は有効であったと思われる。

イ 開かれた授業研究会

開かれた授業研究会では、高等部1学年生活単元学習「宿泊学習に行こう」の研究授業、授業研究会を行った。授業研究会では、協議の柱を「(一時間の)授業の振り返りについて」、「生徒一人ひとりの指導目標と支援について」とし、全体で協議を行った。

生徒の実態に合わせた学習シートの準備や声掛け、毎時間同じ学習シートを使用し、毎時間ごとに設定した目標に対して振り返りをすることや、発表の時間を設定しお互いの振り返りを聞き合うことで、どのようなことを記入すればよいのかが分かり、見通しをもって学習活動に取り組むことができていた。お互いに認め合うこと、励ましあうこと、学級の仲間としてのつながりなど学級の雰囲気もよく、楽しく学び合うことができていた。

見通しをもって取り組める学習活動、生徒同士の学び合いが「できた」「わかった」につながるものが分かった。

(4) 成果と課題

ア 成果

- ・1年生の実習日誌の様式と支援を工夫改善したことにより、主体的に振り返りができるようになった事例、2年生のICT機器を使うことにより、苦手とする授業に参加できるようになった事例、3年生の実態に合わせた自己分析シートや支援を工夫改善したことにより、自己分析し現場実習に臨み反省することができた事例が挙げられた。「生徒が主体的に活動できたか」、「一人一人の目標は適切であったか」、「支援の手立ては適切であったか」の観点から授業を振り返り、PDCAサイクルによる授業改善を行った。目標を見直し、手立てや支援を工夫することの積み重ねや、見通しをもって活動できる学習内容、生徒同士の学び合いも「できた」、「わかった」の達成感や学習意欲につながることを事例検討会、授業研究会を通して確認できた。
- ・事例検討会を通し、生徒の実態と課題、支援について共通理解することができた。

イ 課題

- ・今年度の事例検討会を通し、校内・産業現場等実習の事後学習で活動内容や「産業社会と人間」の指導内容の一部について情報交換をすることができた。しかし、校内・産業現場等の実習の事前指導・事後指導の内容については、学年毎に計画・実施されており、高等部としてどのような内容を指導・支援をすればよいのかなど共有されていない。卒業に向けて3年間の中で何を指導・支援し積み重ねていくか検討する必要がある。
- ・「できた」「わかった」をどのように捉えるのか、研究のテーマについて課題が挙げられていたが、深めることができなかった。

(5) 次年度に向けて

- ・「校内・産業現場等実習の事前学習、事後学習」や「産業社会と人間」の指導内容について学部全体で検討し、その中で学習の振り返りや学習の積み重ねについて研究していきたい。

資料1

月 日 曜日 午前・午後

今日の仕事				評価
今日の目標				
今日の評価 (○=できた △=もう少し・先生に言われてできた ×=もっと頑張る)				
項目				評価
身だしなみをととのえる				
「終わりました」の報告をする。				
確認のお願いをする。				
分からないことがあったら自分から聞く。				
困ったことや手伝ってほしいことがあったとき伝える。				
うまくできたこと				
むずかしかったこと				
次がんばること				
担当者		家庭・ 寄 宿 舎		

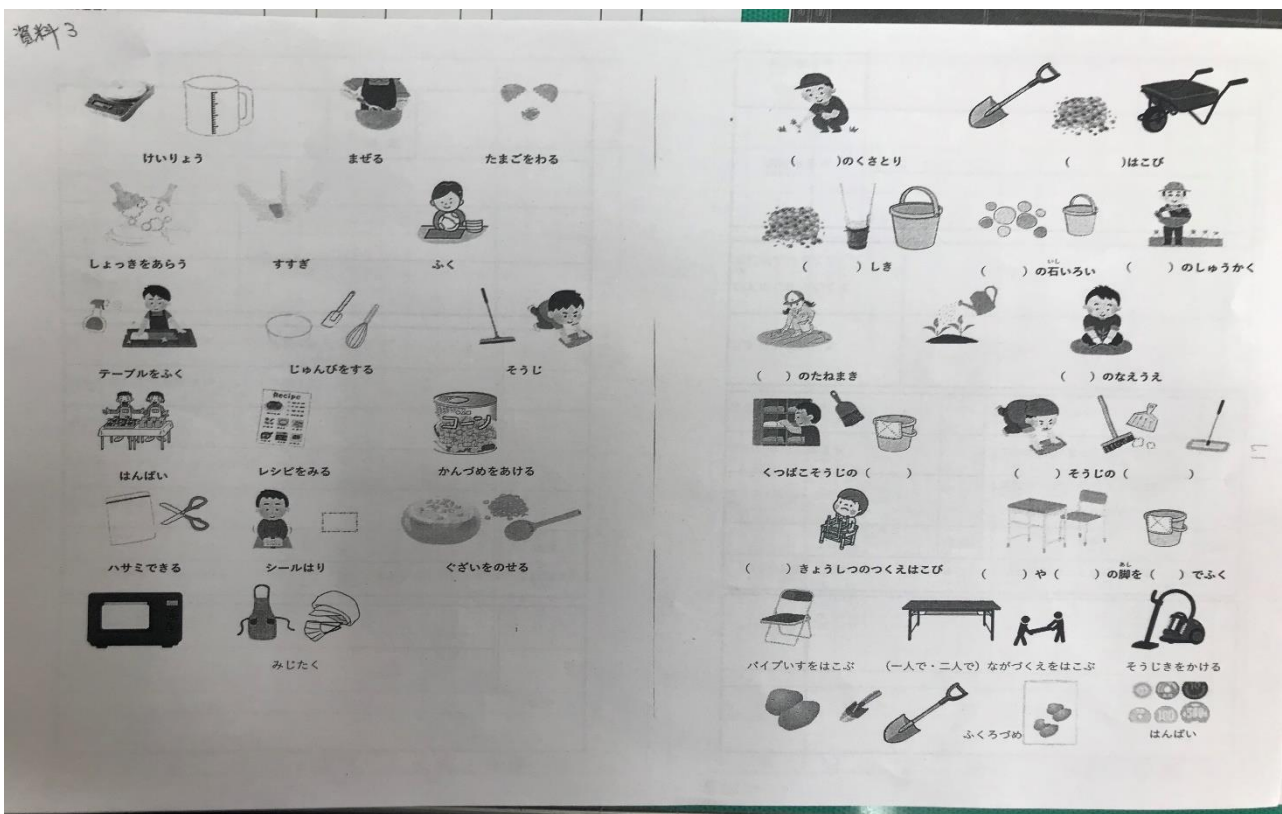
資料1

資料2

月 日 曜日 午前・午後

今日の仕事				評価
今日の目標				
今日の評価 (○=できた △=もう少し・先生に言われてできた ×=もっと頑張る)				
項目	評価	項目	評価	
始まるの時間を守る		「終わりました」の報告 「確認をお願いします」の報告		
身だしなみを整える		「おねがいします」と伝える		
返事や礼をする。		清潔にきをつける		
うまくできたこと				
むずかしかったこと 次がんばること				
		うまくできたこと		
担当者から		がんばってほしいこと		
家庭から 寄 宿 舎				

資料2



資料3

自己分析シート

月 日 ()

資料 4

1. 自己評価が今できていることやできていないことをチェックしよう。

【◎できる ○だいたいできる △あまりできない ×できない ーわからない】

NO.	チェック項目	内 容	事前学習		事後学習	
			自分	先生	自分	先生
基本的な日常生活	1	生活リズム	出勤時間に合わせた生活ができる。			
	2	健康管理	体の不調時（腹痛、体調不良など）に対処できる。			
	3	服薬	薬の決まり（用法・用量・時間など）を正しく飲める。			
	4	自己理解	自分の苦手なことや特性について、理解できている。			
	5	身だしなみ	毎日身だしなみ（入浴、髪、ひげ、つめ）を整えて生活することができる。衣服の調節を自分でできる。			
	6	気持ちの安定	落ち込んだり、イライラしないで毎日落ち着いて生活できる。			
	7	出勤	休まずに職場に通うことができる。遅刻・早退をしない。			
	8	規則を守る	職場や社会のきまりやルールを守ることができる。			
	9	持ち物の管理	仕事に必要な物を忘れない。			
	10	交通機関の利用	ひとりでバスや電車に乗って、職場へ行くことができる。			
	11	電話などの利用	電話で用件（休む、遅れる等）を伝えることができる。			
	12	お金の管理	自分のおこづかいを管理し、計画的に使うことができる。			
対人関係	13	挨拶	場面にあった声であいさつ、返事ができる。			
	14	会話する	自分から話しかけ、相手の話をしっかりと聞くことができる。			
	15	言葉づかい	相手やその場に応じた言葉づかいができる。			
	16	感情のコントロール	注意を受けた時に、感情的な行動や表情に出さずに対応することができる。			

対人関係	17	すなお素直さ	失敗やミスをしたときに素直に謝ることができる。			
	18	意志表示	自分の意思や要求をしっかりと伝えることができる。			
	19	協調性	相手の状況を理解して、行動することができる。			
作業力	21	働く体力	最後まで休まないで働くことができる。（6時間以上）			
	22	指示を聞く	指示どおりに作業ができる。			
	23	正確さ	ミスなく正確に（丁寧に）最後まで作業することができる。			
	24	速さ	指示された手早さで、一定のスピードで作業し続けることができる。			
	25	変化への対応	内容や担当者が変わっても、落ち着いて作業できる。			
	26	危険への対処	安全に気をつけて作業することができる。			
作業態度	27	質問、報告、連絡	必要な時に、自分から質問、報告（作業終了・失敗など）、連絡ができる。			
	28	時間の意識	時間内に目標数が終わるよう時間を意識して作業できる。			
	29	作業意欲	仕事を頑張ろうという気持ちがあり、いつも一生懸命作業することができる。			
	30	積極性	自分から積極的に働くことができる。準備・片付けに自分から取り組める。			
	31	集中力	最後まで、集中して作業することができる。			
	32	責任感	どんな仕事も、指示されたことを最後まで頑張ることができる。			
	33	協力	いろいろな作業を他の人と分担したり、協力できる。			
その他	34	余暇の過ごし方	疲れが残らないように気分転換ができる。体の疲れをとる工夫をしている。			

資料 4

1、自分自身が今できていることやできていないことをチェックしよう。

【◎できる ○だいたいできる △あまりできない ×できない ーわからない】

	NO.	チェック項目	内 容	事前学習		事後学習	
				自分	先生	自分	先生
基本的な日常生活	1	生活リズム	出勤時間に合わせた生活ができる。				
	2	健康管理	体の不調時（腹痛、体調不良など）に対処できる。				
	3	自己理解	自分の苦手なことや特性について、理解できている。				
	4	身だしなみ	毎日身だしなみ（入浴、髪、ひげ、つめ）を整えて生活することができる。衣服の調節を自分でできる。				
	5	気持ちの安定	落ち込んだり、イライラしないで毎日落ち着いて生活できる。				
	6	出勤	休まずに職場に通うことができる。遅刻・早退をしない。				
	7	規則を守る	職場や社会のきまりやルールを守ることができる。				
	8	持ち物の管理	仕事に必要な物を忘れない。				
対人関係	9	挨拶	場面にあった声であいさつ、返事ができる。				
	10	会話する	自分から話しかけ、相手の話をしっかりと聞くことができる				
	11	言葉づかい	相手やその場に合った言葉づかいができる。				
	12	感情のコントロール	注意を受けた時に、感情的な行動や表情に出さずに対応することができる。				
	13	素直さ	失敗やミスをしてしまったときに素直に謝ることができる。				
	14	意志表示	自分の意思や要求をしっかりと伝えることができる。				
	15	協調性	相手の状況を理解して、行動することができる。				

作業力	16	働く体力	最後まで休まないで働くことができる。（6時間以上）				
	17	指示を聞く	指示どおりに作業ができる。				
	18	正確さ	ミスなく正確に最後まで作業することができる。				
	19	丁寧さ	製品や道具を大切に扱い、きれいに仕上げるることができる。				
	21	変化への対応	仕事内容や担当者が変わっても、落ち着いて作業できる。				
	22	危険への対処	安全に気をつけて作業することができる				
作業態度	23	質問、報告、連絡	必要な時に、自分から質問、報告（作業終了・失敗など）、連絡ができる。				
	24	時間の意識	時間を意識して作業・行動できる。				
	25	作業意欲	仕事を頑張ろうという気持ちがあり、いつも一生懸命作業することができる。				
	26	積極性	自分から積極的に働くことができる。準備・片付けに自分から取り組める。				
	27	集中力	最後まで、集中して作業することができる。				
	28	責任感	どんな仕事も、指示されたことを最後まで頑張ることができる。				
	29	協力	いろいろな作業を他の人と分担したり、協力できる。				
その他	30	余暇の過ごし方	疲れが残らないように気分転換ができる。体の疲れをとる工夫をしている。				

資料6

◎できる ○だいたいできる △すこしむずかしい ×できない、むずかしい -わからない

【自己分析シート】
1. 自分自身できていることやできていないことをチェックしよう。 月 日 ()

No	チェック項目	内容	事前・自分	先生	事後・自分	先生
基本的な日常生活	1	生活リズム 規則正しい生活ができる				
	2	健康管理 調子が悪い時に伝えられる。				
	3	服薬 ひとりで薬が飲める				
	4	自己理解 自分の苦手や得意なことがわかる。				
	5	身だしなみ 身だしなみをきちんとできる。				
	6	気持ちの安定 イライラしないで過ごすことができる。				
	7	出勤 休まず通うことができる。				
	8	規則を守る きまりやルールを守ることができる。				

◎できる ○だいたいできる △すこしむずかしい ×できない、むずかしい -わからない

基本的な日常生活	9	持ち物の管理 忘れ物をしない。				
	10	バスの利用 ひとりで送迎バスに乗れる				
	11	電話 電話を使える				
	12	お金 自分でお金をはらえる				
対人関係	13	挨拶 場面にあった声であいさつ返事ができる				
	14	会話 相手の話をしっかり聞くことができる。				
	15	言葉遣い ていねいなことばで話せる。				
	16	感情のコントロール 注意されてもおこらない。				

◎できる ○だいたいできる △すこしむずかしい ×できない、むずかしい -わからない

対人関係	17	素直さ すぐにあやまることができる。				
	18	意思表示 自分の気持ちを伝えることができる。				
	19	協調性 みんなと仲良くなる。				
作業力	20	働く体力 最後まで集中できる				
	21	指示を聞く 指示を聞いて作業ができる				
	22	正確さ ていねいに仕事ができる				
	23	速い 同じ速さで仕事ができる				
	24	危険への対処 安全に気を付けて作業できる				

◎できる ○だいたいできる △すこしむずかしい ×できない、むずかしい -わからない

作業態度	25	質問報告連絡 自分から質問、報告、連絡ができる				
	26	時間の意識 時間いっぱい仕事をする				
	27	作業意欲 仕事をがんばることができる				
	28	積極性 準備・片付けができる				
その他	29	集中力 最後まで集中して仕事をする				
	30	責任感 どんな仕事も嫌がらずにできる				
	31	協力 みんなと協力して仕事ができる				
32	余暇 休みを楽しく過ごせる					

4 寄宿舍

〈研究テーマ〉 寄宿舍生一人ひとりが、成長を感じられる棟行事活動
～ 適切な目標設定・共有と、その振り返り ～

(1) テーマ設定の理由

全校研究の主題である“振り返りの充実”について、寄宿舍においては「日々の生活」と「棟行事活動」どちらで実践するか検討を行った。昨年度まで取り組んできた「生徒の主体性を伸ばすための取り組み」を継続していくことや、これまでコロナ禍で制限されてきた行事活動を再開させていくことなどを考慮し、「棟行事活動」での実践が適切であろうと考えた。

(2) 研究計画

	内 容
4 月	
5 月	全校研究会① 今年度の方針の確認
6 月	活動・研究実践
7 月	
8 月	
9 月	
10 月	
11 月	
12 月	▼
1 月	今年度のまとめ
2 月	全校研究会②
3 月	次年度に向けて

(3) 実践の内容・方法

ア 実践の内容

研究主題を受けて寄宿舍では、上記の通り「棟行事活動」での実践を行うこととした。コロナ禍により生徒はもちろん寄宿舍指導員においても、これまで蓄積してきた行事活動のノウハウが失われたり、見直しの必要があったりするであろうことから、棟単位での実践とし、棟の実態に応じて柔軟な取り組みができるようにするとともに、棟内の職員間でも意見を出し合って進めることから、コロナ禍以降における行事・余暇活動のノウハウの再構築やブラッシュアップを目指した。

イ 実践の方法

各棟での実践としたことから、寄宿舍全体としては大きく3点を確認して進めた。

- (ア) 生徒の主体性を引き出すような手立てを検討すること
- (イ) 一年間の見通しをもち、複数回の行事を計画すること
- (ウ) 行事ごとに振り返りを行い、次の活動にできる限り活かすこと

<実践例>

【1F北】(男子棟) 6名(高3:4名 高2・高1:各1名)

目標：行事活動の機会を増やし、経験の拡大を図る。
具体的な実践：「月1の会」を計画しよう
1. 指導内容(手立て) (1) 行事の計画について、事前にルールを設定し生徒と確認する。 (2) 企画者は当番制とし、全員が1回以上企画・運営する。 (3) 企画者以外の参加は任意とする。 (4) 原則、舎室担当職員が企画運営のサポートに当たる。
2. 主体性を引き出す(育てる)工夫・振り返りを充実させる工夫など (1) 必ず計画書を作成することとし、行事後に振り返りを記入した。 (2) 会の名前やお知らせ方法についても担当生徒が自由に決定できるようにした。 (3) 生活経験の拡大も含め、買い物等の準備もできる限り企画者が行うこととした。
3. 生徒に対する評価 (1) 主体的な活動になっていたか ・時期を見て生徒自身から企画を打診してくるまでには至らなかったが、職員の簡単な声掛けで最後まで進めることができた。 ・活動の中で、生徒自身がお知らせの方法や活動内容について工夫や考慮する様子が見られた。 ・同じ活動(企画)にならないよう考えている様子が見られた。必要に応じて自宅で準備をする様子もみられた。 (2) 達成感や自身の成長を感じている様子が見られたか ・「買い物に一人で行くことができた」「寄宿舍生活で必要な物があったら自分で買いに行きたい」など、経験を通して成長を感じている振り返りがあった。 (3) 次の活動につながるような前向きな振り返りが見られたか ・他の企画者の反省を活かしたり、参加した行事の感想をもとにしたりして、全員が楽しめる企画を考える様子が見られた。
4. 職員に対する評価 (1) 生徒にとって適切な目標が設定され、職員間で共有されたか ・生徒が提案した企画に対して準備方法などを助言することによって、「買い物」や「集金」などを経験する場を設けることができた。 (2) 行事後の生徒の振り返りを、次に生かすことができていたか ・月一回にしたことによって、短い間隔で複数回行うことができ、「実践→振り返り→実践」のサイクルが成立していた。
5. その他(自由記述) ・小規模な活動を繰り返していくことによって、「棟行事」の枠にとらわれず、「余暇活動」的な側面をもった活動ができてよかった。日常生活に張り合いや刺激が生まれた。 ・「月1会」を企画する経験が棟行事にも生かされていた。お知らせ方法の工夫や企画運営→反省の流れがスムーズに進み、充実した活動になった。 ・棟の生徒が全員揃う曜日が限定されることを考慮し、年間行事計画等を確認して計画的に進めればよりよい活動になったのではないかと。 ・活動のサポートを「原則舎室担当」としたが、日程的な面や内容の鮮度や旬、生徒の在舎状況等々を鑑みると、他の職員と少しずつ進めていってもよかったかもしれない。

【1F南】(女子棟) 4名(高3:1名 高2:2名 中3:1名)

目標: 「誕生会」を通し、思いやる気持ちを培う。
具体的な実践: 「誕生会」を企画し、誕生者をみんなでお祝いする。
1. 指導内容(手立て) (1) 始めに「誕生日とはどんな日か」、「誕生会ではどんなことをしたらよいか」を確認する。 (2) 誕生者の希望を取り入れながら、誕生者以外の生徒で話し合い、企画することを確認する。 (3) 誕生者の舎室担当が主に支援に入り、話し合いや作業のサポートを行う。 (4) 初回は職員主導で行い、2回目から生徒主導で企画運営する。 (5) 自分の活動を振り返るとともに、次の活動場に活かしたいことを確認する。
2. 主体性を引き出す(育てる)工夫・振り返りを充実させる工夫など (1) 気軽に意見を出し合えるように、「棟会」という改まった形ではなく、「女子会」というネーミングでリラックスした状態で話し合えるようにした。 (2) 進行や装飾などを係分担することで、自分の希望を形にしやすくした。 (3) 職員からの提案を含め、選択肢の幅を広げられるようにした。
3. 生徒に対する評価 (1) 主体的な活動になっていたか ・回を重ねるごとに経験した内容を次に盛り込んだり、誕生者が喜ぶためのアイデアを考えたりすることができるようになった。 ・自分で時間を決めて、誕生会の準備をすることができた。 (2) 達成感や自身の成長を感じている様子が見られたか ・人前で話すことに苦手意識をもっていた生徒が、司会に立候補して務めることができた。 ・「誕生者を喜ばせたい」という気持ちで、装飾作りをすることができていた。 (3) 次の活動につながるような前向きな振り返りが見られたか ・一人一人の思いが違い、全員での振り返りが難しかった。 ・個々の振り返り(「楽しかった」、「美味しかった」、「責任をもって準備した」)はできたが、次の誕生会に活かすための振り返りが難しかった。
4. 職員に対する評価 (1) 生徒にとって適切な目標が設定され、職員間で共有されたか。 ・職員間で目標の共有はできていたが、生徒の主体性を尊重すると「楽しむ」ことだけに焦点が当たった会になり、「誕生者を祝う」ことに対する心遣いが足りなくなるときもあった。 (2) 行事後の生徒の振り返りを、次に生かすことができていたか ・本来の誕生会の意義の理解が難しかったり、一人の生徒の意見に同意する形になってしまうことが多かったりしたため、振り返りを活かすことに苦慮した。
5. その他(自由記述) ・経験していないことへの活動は消極的であり、経験してこそ得られる「楽しさ」や「うれしさ」があり、仲間と共有できる良さが棟行事にはあると感じた。 ・活動を楽しみにする気持ちが高まるほど主体性が育まれ、意欲的な取り組みができると感じた。

【2F南】(男子棟) 8名(高3:3名 高1:1名 中3:2名 中2:1名 中1:1名)

目標: 経験、視野の拡大
具体的な実践: 外出(買い物、食事、カラオケ) 舎内外でできること(ゲーム、おやつ、テイクアウトでの食事、スポーツ)
1. 指導内容(手立て) (1) やってみたいことを引き出す支援(希望をさく) (2) 経験したことのない活動、職員側からの提案(視野を広める) (3) 高等部を中心とした企画、運営 (4) 中学部の自己選択、自己決定できる支援
2. 主体性を引き出す(育てる)工夫・振り返りを充実させる工夫など (1) 余暇の過ごし方について「考えてみる」「発言してみる」など、どんなことでも、自由な発想で、積極的に意見が出しやすい雰囲気作り。 (2) 職員側からの提案も含め、選択肢を増やしながらの話し合い。
3. 生徒に対する評価 (1) 主体的な活動になっていたか ・ 中学部生徒は、自己選択、自己決定できたことを主体的にとらえることができた。高等部生徒は、企画、準備など部分で主体的に活動することができた。 (2) 達成感や自身の成長を感じている様子が見られたか ・ 外食時やカラオケ店で、会計や注文を自分でできたことについて「緊張したけど、経験できてよかった。」という発言があり、自信にも繋がった。(高) ・ 外食やテイクアウトメニューを自分で選べるようになった。(中) ・ 希望が叶うかどうか迷い考える段階から、希望を伝えたいという姿勢が感じられるようになった。 (3) 次の活動につながるような前向きな振り返りが見られたか ・ 前回の経験を生かし、時間の有効的な使い方などを考えるなど次回の活動に前向きで意欲的な振り返りができた。
4. 職員に対する評価 (1) 生徒にとって適切な目標が設定され、職員間で共有されたか ・ 目標と生徒の実態や希望に合わせた計画ができるよう、共有しながら取り組むことができ、適切な目標設定であったと思う。 (2) 行事後の生徒の振り返りを、次に生かすことができていたか ・ 視野を広げるため、ゲームやスポーツなどのレクリエーション的な職員側の提案は、生徒の実態、学部(年齢差)の違いなどから実践までいたらなかった。 ・ 経験した活動(行事)の繰り返しの活動となった。生徒の気持ちを尊重すると目標の「経験、視野の拡大」から離れてしまったかもしれない。その都度具体的な目標に関連付けながら、次に生かせるよう取り組んだ。 ・ 「食べる」ことは、全員が楽しいこととして捉えられているため、そこから発展していく支援や働きかけの工夫が必要だった。
5. その他(自由記述)

(4) 成果と課題

<成果>

・主体性の伸長と経験の拡大

前回の行事の反省をもとにして、次の行事で変化や工夫を加えようとしたり、皆に楽しんでもらえるように自宅で準備をしてきたりするなど、生徒が主体的に活動する様子が数多く見られた。そのような活動が難しい生徒でも、食事の内容を自分で決めるなどの意思決定ができた等、生徒それぞれに応じた主体性の成長が見られた。また、生徒の振り返りでは「一人で買い物ができるようになった。」「(食事外出の際) 緊張したけど、自分で注文ができた」など、様々な経験を通して達成感が得られたという声が挙げられた。

・棟行事活動の充実

棟単位での実践としたことで、活動内容の選定や話し合い・準備の方法などを柔軟に選択・変更することができた。そのことにより生徒から多様な意見が出やすくなり、活動の幅が広がった。コロナ禍により行事の経験が乏しかった現在舎生にとって、他の棟の行事も含めて様々な行事・余暇活動があると知ることができたことや、自分自身が実際に行事の企画運営をする経験は、今後の生活に繋がっていくと考えられる。

<課題>

・目標の設定と共有

年間の大きな目標であった「主体性」「振り返り」「達成感」については、前述の通り概ね達成できたと考えられるが、一つ一つの活動において目標を設定し、それを生徒と共有して進めるところまでは難しかった。来年度も引き続き目標設定と共有を推進していきたい。

(5) 次年度に向けて

生徒たちが主体的に複数の行事を繰り返していくなかで、どの棟においても成長が見られた。日々の生活に刺激や張り合いが生まれるよう、次年度も継続して取り組んでいきたい。また、これからの寄宿舎生活を考えたとき、「みんなで話し合って、係を決めて…」というこれまでの行事や活動だけではなく、日常の何気ない会話のなかで自然発生的に出てくる行事や活動(「暑いね」→「何かジュースでも飲みたいね」→「じゃあ今回は俺が買いに行くわ」というようなイメージ)がたくさんできるような寄宿舎生活を目指していきたい。

VI 研究のまとめ

校内研究主題を受け、小学部では生活単元学習の事後学習の充実、中学部では作業学習の始めと終わりの会の改善、高等部では学年ごとに授業の振り返りに焦点を当てた事例検討会、寄宿舎では行事の振り返りの充実をテーマとし、それぞれ研究実践に取り組んだ。

「振り返り学習」の捉え方や検討した内容は各学部・寄宿舎によって異なるが、児童生徒が分かって活動できる目標を考え、それに基づく振り返りについて振り返りシートや作業日誌等の様式を検討・改善しながら実践を行うことによって、児童生徒が「できた」「わかった」を実感することができた。そのことについて自分なりの表現方法で伝える姿が多く見られるようになった。難しかったことを次の目標にする様子も見られるようになってきた。

一方で、適切な目標設定をするために、生活単元学習や作業学習、産業社会と人間などのねらいや年間の計画について学部内で再確認する必要があるという意見が挙げられた。また、何をもって「できた」「わかった」とするのか、教師の主観で判断するだけにならないような評価の基準を明確にしていくことが必要であるという課題が挙げられた。

各学部の成果と課題を共有し、次年度の研究実践に生かすことによって、児童生徒が「できた」「わかった」と感じ、次の活動への意欲につながるような授業をつくっていきたい。

「いわての授業づくり3つの視点」

視点1 学習の見通し

■児童生徒の姿■

★学習課題（学習問題）を設定し、学習のゴールを見通す

- ・この時間で、何ができるようになればよいか、何がわかればよいかをつかんでいる。
- ・課題が、自分にとってどのような意味(役に立つ、楽しいなど)をもつのかを理解している。

★学習課題（学習問題）の解決に向けて、学習内容を見通す

- ・既習内容を用いて解決する場合、どの既習内容を活用すればよいかを確認している。
- ・既習内容を発展させて解決する場合、どの既習内容と関連付ければよいかを予想している。
- ・新しい知識や技能を必要とする場合、先生や友達の説明などにより解決方法を理解している。

★学習課題（学習問題）の解決に向けて、学習プロセスを見通す

- ・学習プロセスを形態、活動内容、時間などで捉え、どのように学ぶのかを理解している。

【指導の留意点】

- ◎児童生徒一人一人が、自分の学習課題（学習問題）として捉えることができるように工夫する。
- ◎身に付けさせたい力、学習活動、時間内に解決できることを意識した学習課題（学習問題）とする。
- ◎指導者が、学習課題の解決に取り組んでみた上で、学習内容や学習プロセスなどを構想する。

視点2 学習課題(学習問題)を解決するための学習活動

■児童生徒の姿■

★学習課題（学習問題）を解決するために学習活動をする

- ・「学習の見通し」に沿って、主体的に学習している。
- ・思考方法や表現方法、語彙や用語などを理解し、その時点での自分の考えをまとめている。
- ・自分の考えをもって、ペアやグループ・全体での学習に臨み、自分の考えを発表したり友達の考えを自分の考えと比べながら聞いたりしている。
- ・わからないことは、自分で調べたり友達や先生に質問したりしている。

★一人一人が学習課題(学習問題)を解決する

- ・学習課題について、協働的な学習を通して深まったり広がったりした内容を、理由や根拠がわかるように記述したり話したりして、一人一人が自分の考えをまとめている。

【指導の留意点】

- ◎学習課題（学習問題）を解決するための手立てや視点、学習活動の方法について具体的に指導する。
- ◎学習課題（学習問題）を解決するために、主体的・協働的な学習展開となるように工夫する。
- ◎児童生徒一人一人が、身に付けるべき力を確実に身に付けることができるような学習活動にする。

視点3 学習の振り返り

■児童生徒の姿■

★学習内容を振り返ったり、学習の成果を実感したりする

- ・授業を通して、できるようになったこと、できなかったこと、わかったこと、わからなかったこと、興味をもったことなどについて、自分の言葉で説明している。
- ・評価問題を解いたり身に付いた力を確認したりして、学習の成果を実感している。

★学習プロセスを振り返ったり、協働的な学習活動の良さを実感したりする

- ・どのような学習プロセスによって自分がどのように変容したのかなどについて、自分の言葉で説明したり、「友達から学ぶことができた」など、学習活動の良さを実感したりしている。

【指導の留意点】

- ◎学習の見通しで見通した、ゴールや学習内容、学習プロセスに照らして、振り返られるように工夫する。
- ◎必要に応じ、児童生徒の自己評価・相互評価、評価問題、教師の評価を適切に位置付ける。
- ◎児童生徒一人一人が自分の学習について、達成感や有用感を自覚できるように工夫する。